

妻
は
歌
う

妻は歌う

平林たい子



毎日新聞社

妻は歌う

(著者との申し合わせにより校印を省略します)

昭和32年12月20日 初版
昭和33年1月10日 再版

¥ 240

著者	平林たい子
発行者	岸哲男
印刷所	図書印刷株式会社
製本	大口製本所

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一ノ一一
大阪市北区堂島上二ノ三六
門司市清滝町一ノ九〇二
名古屋市中村区堀内町四ノ一



出	罪	悲	墓	情	同	鶴	事	花	良	姉	醉	乗
	と	し	場	熱	性	見		松	人	の	っ	
帆	罰	み	の	の	の	の	故	家	とい	役	た	客
		の	す	河	友	夜			う	所	客	船
		時	み						もの			

93	83	75	69	60	53	44	37	32	26	21	14	3
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

み	故	返	破	無	黒	ス	桑	幸	秘	初	太
					い	ト				夏	平
れ					天	ク				の	洋
					使	ト				街	上
ん	国	信	鏡	明		ン	港	福	密		人

234 226 217 212 201 189 177 156 142 134 124 102

妻^{つま}

は

歌^{うた}

う

每日新聞（朝刊）連載
一九五七・三・二三—二〇・二七

乗 船

電車が、ガアツと六郷の鉄橋にさしかかると、雪子は、ハンドバッグのふたのかげにかくして、コムバクトの鏡をのぞき込んだ。東京駅に迎えている姉や妹に鼻頭の光っていない顔を見せて、安心させてやりたい、慮りからである。決して、眼の前の由良をたのしませるためではない。

熱海を電車が出たときから、由良は、殆んど一瞬の休みもなく、おかしいほど雪子を凝視しつづけていた。そんな彼の眼の前では、化粧直しも一種の媚態になりかねないので、雪子は無意識に、バックスキンのふたを顔半分まであげて、そのかげで気づかれないように小さきまな手つきでうすいパフをはいた。

伊豆めぐりの三日間の新婚旅行は、そうでなくとも着ない着物の旅行で、由良とさし向いに坐った裾の合わせ目が絶えず気になった。それに、母のつけてくれた肌襦袢の赤襟を彼が目ざとく見つけて、人目もかまわず衣紋の中

を覗き込みながら、

「この赤のために、襟もとがとても色っぽく見えるね」

とぬけぬけ言ってから、急に雪子は襟もとを彼に見せないようにした。そしてそこにも神経があつまって肩が凝った。

それやこれや自分のしぐさを思いあわせると、最初の夜を箱根で過ごしたときから、雪子の由良に対する疎外は始まったらしい。自分でも思いがけない心理だった。式をあげる前日まではかっ金色のまばゆい光の中に躍り込むような自分を想像して半ば酔っていたのに、旅で泊まった最初の日から雪子は由良の仕草が目について、激した彼と調子を合わせきれず、どの瞬間にも醒めて見成っていた。

「短いもんだなア。乗船までにもう二日しかない」

由良は窓外にひらけた東京の街を見やりながらつぶやいた。アルマイト色の夕陽を浴びた東京の市街は、建物の一つ一つが落ちて行く太陽の方に向いて何かの哀愁を訴えているように見える。

「そう、そう、君と船に乗ってから電信で取交わす暗号をきめておかなくっちゃ」

「あら、普通の電文ではだめなんですか」

「勿論いいけれどさ、通信士にきかれたくない電文だってあろうじゃないか」

由良は、雪子の平静すぎる感情にかぶせるような言い方をした。

しかし雪子はこの由良と、どんな人にきかぜられない密語を取交わすのかと、ぼんやり自分の胸に訊ねていた。いくら考えても特別な言葉の用意はない。

「そうだ。家にかえれば、日春丸の二等航海士のつくった暗号がノートに書いてあるから、あれをそっくりかりて置いて行こう」

由良が新造船日久丸の事務長の補佐役として、アメリカ南部のロングビーチ通いの鉱石積みとり船に乗組むのはこんどがはじめてである。が、ポルトガル領の、問題になっているゴアには、一万噸級の貨物船で、もう三年ちかく往復しているベテランである。

こんど新造して、まだ鶴見のドックにつながれている日久丸はウインチが二十個もある新型船だから、一万六千噸の積荷や荷おろしがたった二日でできる。ロングビーチまで十五日で行くとして、二日で荷をつんで三十二日目には、もう日本の八幡か釜石あたりにかえって来られる。が、電報でその地と呼んでおく雪子と会社の寮で一緒にくらすのはたった二日で、日久丸はまたロングビーチに向けて、空船で出発するだろう。

由良は、船が入港したとき同僚たちが、荷揚地の寮や安

宿で、呼んである妻と落着きなく身にならない愛を遂げている惨めなさまを、いままですべて見て来た。

自分だけは、そんな安直さには堪えられないし、愛情というものがそんな風に冒瀆されるのを憎んでさききたのだが、同じ境遇になってみると、やはりそうするより外芥子粒のような哀れな二点が、この地上で出逢うすべはないのだ。

それにつけても、東京について雪子の肉親たちにとりまかれる前に、雪子の気持の把手をもっとしっかり握っておきたいあせりを感じていた。女心というものが、これほど揺れて形の定まらないものだとは結婚後にはじめて発見したことだった。

しかし、愛情の幸福というものは、相手の心の中の不確かなものを確かめようとする過程にあるのかも知れない。この不安や焦燥ですら、それがなかった以前にくらべて、何という生きがいだろう。

「感概無量だなあ。君という具体的な目標をもつ前の印度航路時代には、海上の感情といえば、陸と海と、男と女という単純な区分しかなかったんだが、いまは全然ちがう……」

女ならば、岸壁にオパールの粗玉を売りにくるゴアの真黒なはだし女にさえ女を感じて苦しんだあの若い苦しみ

は、女の雪子には、語ってもわかりそうもないし、かえって誤解されるかも知れない。

「陸の人達は、馬鹿の一つ覚えのように船員を見るとすぐ『港々に女あり』なんていうが、近頃の船員の気持は絶対にそんなもんじゃない。僕ばかりでなく、みんな真面目で、生活の設計を考えているんだからね」

雪子は、だまって、由良が何とかして手ごたえを得るためにばら弾のように射てくる言葉をうけとめていた。

もう電車は、新橋の広告の多いビルディングの角を曲って東京駅の構内に入りかかっていた。標識柱や電柱が一本ずつはしって出迎えにくる。

由良は雪子のスーツケースと、みやげの風呂敷包みと自分の小さいボストンバッグを両手に持って、雪子のうしろから歩んだ。

「あら！ 女礼子ですわ。お姉さんも来ています。やっぱりわたしの思ったとおりでしたねえ」

電車の中ではふしぎに言葉寡なだった雪子が急にいきいきとしたはりのある声を出した。

ホームにおいてみると、出迎えは、姉の^{いいた}出田佐久子と妹の女礼子のほかに、姉の役所で姉の秘書格の仕事をしている川奈がいた。川奈がどうして自分の出迎えなどに来たのだらうと雪子は、指^さ抜けしたネクタイの川奈を横から見

いた。

「ただいま——わざわざおむかえありがとう」

「どう？ あちらは東京よりよっぽど暖かったでしょ」

結婚の経験は勿論、多分恋愛の経験もない姉の佐久子は、こんなときにも、想像は行ったさきさき^{さきさき}の気候ぐらいにしか及ばないのか、頼もしい冷静さで、あたりまえのことをたずねている。

佐久子は、英語の単科大学を出てから官界に入って、その年齢としても女としてもめずらしく、女気の少ない役所でとんとん拍子に課長になった。婦人局とか児童局とか女にふさわしい部署なら、局長になったら最後出世の袋小路に入ったようなもので、部下の男性の年少労働課長などが自分を越えて昇進して行くのを横目で見送ることになる。

が、佐久子の課は、いままでも男性の仕事とされて来た所だけに、その課長となったことには洋々たる前途が約束されていた。

それに女は、人使いが下手だといわれているのに、彼女は男性の部下を手綱捌きよく扱っている^{いまま}と見えて、いままにかつて傲慢とか、卑屈とかいう噂を立てられたことがない。ただ一つ不可解なことはあれだけの美しさをもった女が、誰にも誘われずに男性の中を泳いで来たということ

だ。が、彼女の低温でムラのない人生観の前には、誘いが誘いにならず、たくらみも嘘かしも立消えて行ったにちがいない。

そんな姉と正反対な女礼子は、小賢しく臉をしばたいた、しきりに、雪子だけに、何かの信号を送ってから「ずい分疲れてらっしゃるわねえ。由良さんみたいに感情の強い方との組合わせは、お姉さんには本来むりよ」とささやいた。

「なに言ってるのよ」

雪子は笑って小声で反駁したが、女礼子になら、いろいろ喋りたいことが胸いっぱい詰まっていた。

世の中には、自分の美しさを全然意識せずに振舞っている女が間々あるものだ。ふしぎなもので、彼女自身が意識しないで振舞っていると、その美しさの色があせてくるのか相手もそれをだんだん忘れてくる。女の美しさは、本人自身がそれを意識して誇張するためいよいよ魅力を発揮するものらしいのである。

一番上の姉の佐久子は、学校時代からそんな娘だった。上学年になっても、自分の情緒を過剰にするための音楽会や映画にはあまり足を向けなかった。学友がすべて小説に耽溺するある時期に、彼女は、亡父の友人の家に通ってこっそりなぎなたを習っていた。

それに彼女の特技は碁であった。女学校の頃花田八段の所に四、五回通っただけで同八段から弟子入りをのぞまれたことがあった。

髪をパーマネントウェーブでちぢらすのがはやる時期が来ても、母の使っている無臭の椿油をつけて、長い髪の毛を切ろうともしない。

佐久子は、末妹の女礼子が新婚夫婦のアパートについて行きそうなのを制して

「もうかえりましょう。吉祥寺まで行ったらかえりが大変よ。それに、貴女の学期試験はまだすんでいないんでしょ」

「試験なんて、あんなことに情熱は賭けられないわ」

女礼子はずばりと姉の官吏らしい心遣いをはねのけた。

「じゃあビリで進級する方がいいのね。貴女がたの考え方で行くとらくでいいわね」

佐久子は笑いながら、そばに歩んでいる部下の川奈をかえりみる。

「ま、そういうことでしょうね。しかし女礼子さんの考え方にも理窟はありますよ。あとで考えてみると、試験勉強なんてブールの中の生存競争でしたよ」

「私は出世主義者じゃないらしいわ。優等生はどうも嫌いでね。自分にできるだけの勉強をします」

女礼子は小つびどく姉に当たつたつもりだったが、佐久子は問題にせずにやはり笑っていた。

こんな縁どおい会話にかこまれながら、新婚の由良と雪子とは、東京駅の地下道を通して中央線の乗場に来ていた。「じゃあ皆さん、いろいろ乗船の準備がありますので、ここで失礼します。出田のお母さんにはいづれ挨拶にうかがいます」

せめてのこりの四十八時間をあますところなくこの陶酔に浸りつづけたのが由良の希いである。彼の言葉にはこれ以上の見送りへの拒絶が露骨にひびいていた。ふと彼に寄り添った雪子とは見ると、姉の佐久子のそばに立った川奈の方をじっと見ていた。

井之頭公園のまっ黒な杉木立を見はるかすモルタル塗のアパートに新婚の由良夫妻の新居は用意されていた。

入口のドアの中に畳半畳の靴ぬぎ場があり、ままごとのような流しを右手にして、さらに一枚の障子が室の前に立っている設計は、ここ二、三十年來、日本のアパートをきまりきった世智辛^{せいちがら}い形にしている。

二人がそのせまいたたきの上に立って外套を触れ合ったとき、思わず由良は持っていたバッグやケースを障子の中に投げて、雪子をしっかりと抱いた。その腕の締める力強さ

に、雪子はうめいて身も世もなく身もだえした。それに由良の抱いかぶさる接吻は、わりやり水の中に首を突込まされて息をつめている瞬間のような息苦しさだった。

「どうかしたの」
ばかにならない雪子の抵抗におどろいて、由良は雪子の顔をのぞき込む。

「いいえ……」

雪子はわらって何か言い淀んでいた。

「僕は君に嫌われているんじゃないのかな」

とうとう由良は、箱根の宿を立ったとき以来胸に宿していた疑問を口にしてしまった。

「そんなことはありません。そんなことはありませんけれども——、ちょっといいないわ。だけど気にしなくてもいいんです」

雪子はいまいだけれども箱根以来の記憶を見つめながら自分の気持には正直に向かっていた。しかし、このうとましさと軽蔑とをどうしてそのまま語れよう。

男性が思いがけない程不潔なものだと結婚してはじめて知ったことだった。神だとか芸術だとか美だとかいうことばを、女以上にたやすく口にする男性が、あんな不潔に堪えて生きていたのかと考えると、男性は偽善者だとしか思われない。精神が顔をそむけるほどの不潔さの中に、汚

い慾情の蛆に這い廻られながら、男性は平然と生きていたのか。

雪子是由良を見直していた。最初から彼女はこの結びつきを恋愛とよぶには一点も足りない所があった。けれども、由良が嫌いでは絶対になかった。

そして相手の由良に至っては、雪子の熱情不足を何倍も補ってあまりあるほどもえていた。そして、自然な成行で結婚ということになった。

尤も、なくなった代議士の妻である出田の母や親類は、由良が鉄鉞を積む貨物船の乗組員だときいたときには、何かひどく荒々しい人間を想像して反対した。が、逢ってみると、重厚な眉宇に熱情とも矜持とも見える清潔さが見えて、生半可な丸の内種族よりもいっそ好ましく思われた。特に姉の佐久子の手放しな由良讃美は、親戚の輿論をたやすく引っくりかえす有力な発言となった。

翌朝、雪子は絹のついたエプロンの紐をうしろでリボンのようにむすんで、甲斐々々しくアパートの台所で立働いた。

ガス焔炉も罫子をやく網も、真新しい金属の灼ける匂いを発していた。新しい火口から青い焰が噴き出す音は、まだ床の中で毛布をあごまでかけている由良の枕もとまでひびいた。

「母がきょう二人でくるようにと言っていましたけれど、どうなさいますか？」

「勿論うかがわなくちゃ失礼になりますよ。だけれども僕の本当の気持は、一日中どこにも出ないで、君と二人っきりでこの室にじっとしていたいんだ。御馳走も酒も何もない。酒は呑まなくても、ずっと酔払っているような気持なんだ。ああ僕は幸福だよ」

由良はさっきから目をさまして、雪子の挙措をたのしむように目で追っていた。家庭というものの平凡な柔らかさについては、航海のつれづれに先輩からいろいろときかされてきた。しかし由良には、この新しい環境は凄じく強烈な刺激で、とても、日常生活のつづきではなかった。

「でも行きましようね。女礼子もきくと待っていますわ」

雪子是由良の甘い囁きを遮った。彼女の本当の気持は、女礼子に逢いたいよりも、ここに二人で顔をつき合せている息苦しい時間が堪えられないのだった。

「雪子さん、僕はもうあす一日しか陸にいられない人間だよ。日久丸の出帆はまだ先だけれども、あさっては乗込まなくっちゃならないんだ。僕の気持わかる？　僕はもつと君に堪能してから乗船したいんだ」

「わかっていきますわ」

「わかっていたら、もっと僕を甘えさせてもらいたいんだ」

よ」

「ずい分甘えてらっしゃるのに——これでもわたしは布団むしにされているようで、息苦しくって仕方ないのよ」

「息苦しいって！ そうかなあ」

由良は、抗議したい拒絶を受けた面持で、素裸なたましい背中を出したまま、シャツを着はじめた手をとめる。「結婚まえに、貴方は、海員の教養だとか、航海中の船内の雰囲気などについて、とてもいい意見をいろいろ言っただけでしょう。あんな貴方と、結婚後の貴方が、まるで私にはちがった人に見えてしょうがないんです。結婚後の貴方はとてもだらしなくってまるで……」

思いきり汚い言葉がその時雪子の舌の上に乗っていたが、さすがにそれだけは口外しなかった。

由良は苦笑した。しかし、その苦笑は寛大だった。

翌々日の朝、由良は見送りの雪子をつれて丸の内の本社に顔を出した。そこで一緒になった八代三等機関士と一緒に、ちょうど鶴見のドックに行く会社の空車に便乗することにした。折悪しく雨もよいの寒い日で、七、八米の風が街路樹をゆすぶっていた。

八代もいままでのゴア通いから、ロングビーチ通いの新造船に配属替えされた仲間だった。まだ独身の八代は、新婚の二人にうしろの席を与えて、大きい鞆を足もとに置いて

たまま気軽く運転台にのった。彼は後を向いて

「ロングビーチじゃあまりもてないぜ。僕はシャトル通いの方がずっと好きなんだがな。あそこなら街の気持が全体に地味だから、バアに行ってもアメリカ人の客とそんなにおくれはとらないがね、ロングビーチとなると、客は殆んど車をもって来て、さあっと女をつれて行っちゃうんだ。とことこ歩いてくるジャップなぞ振向くやつはいないよ」

「どうせ大した散財はできないさ。太平洋側じゃ一船の許可ドルは大西洋の半分だというじゃないか」

「一千弗だよ」

「へえ、四十何人で一千弗かい。それはひどい。一人が二十何弗じゃみやげのサンキストも買えないな」

「サンキストか。あんなものは買ってくる必要ないな。日本人がつくらなくなつてから、むやみに皮が厚くなつちゃつて、味がガタ落ちだ。むしろ、日本でできるオレンジの方がいいくらいだ」

割に考えふかいインテリ型の由良と対照的に、独身の八代は吞気で、港々の情趣をたのしむ型の船員らしい。

「ときに由良君、汽船部委員会は、船主団体に提出する要求の具体案を出したろうか」

「さあ、神戸で委員会をひらいた筈だが、まだきいてない。われわれの船が出るまでには結果がわかるだろう。報

告するよ」

雪子は、二人の会話に聞耳を立てていた。こうして二人の喋ることをきいていると、やっぱり雪子には、由良のケレンのない人柄の感触がたのもしく思われて、箱根以来あれほど彼を疎んじた自分の気持は、どうかしていたのかも知れないと反省された。

第二京浜国道を鶴見に近づく、鉛筆みたいに立並んだ煙突はみんな煙をはき、修繕の行きとどかない道路を乗用車とトラックとが混み合せて泥をはねていた。ともにも何にも日本の経済が戦争の打撃から起き上ったさかんな姿が如実に見える。

三人の車は、日本鋼管の造船所の中に入って行った。露天に並んだ巨大な船台には、いくつものつくりかけの船が大ビルディングのような形をととのえかかって、冷雨の中に電気熔接の青い火花をさかんにあげている。

六万トンというモンロヴィア籍の大タンカーが、浮ドックで艤装している向こうに、ウインチを林のように立てた日久丸が見えた。

「あれが由良の乗って行く船だな」

と思ったときどういふわけか、雪子の目に突然涙が溢んだ。全くふいに汗みたい何の感情もなく涙が溜って来たのだ。雪子はひどくてれながら目の前にそびえた外国

注文の大タンカーを見上げた。

「こんな大きな船をつくって売ろうになったんですね。

日本の経済力もたのもしいじゃありませんか」

「ある種の政治家の言いそうなことを言うんだね」

由良は笑って、可愛い子供を見るように雪子を見おろして、

「つくる船を外国に安く売っていい気になっている間に、その船が、みんな日本の海運業の競争者に廻るんですよ。目さきばかりの政治だ」

八代機関士は、氣を利かして二人をのこしたまま、日久丸の乗船通路になっているタンカーのタラップに足をかけていた。由良は、八代の姿が見えなくなると、片手で雪子を抱え、片手に鞆をさげて、海風が吹きつけるタラップをのぼった。

足の真下には紺青の潮が濃い液体のような波を揺っていた。由良は、自分の翼の下にじっとちぢこまっている温かい動物を、思いきり羽がい締めにして手ごたえを見たい残酷な嗜好を感じていた。

「雪子さん、約束して下さい。船が出るまでにはまた一ヵ月あるんだから、その間は毎週面会にくるでしょう？ 僕もまた下船できるし、船に君が泊まることもできるんだ」風に吹きとばされる声を庇うようにして、由良は桃のよ

うなむく毛の生えた雪子の小さい耳の穴に、ひたむきな言葉を一語ずつ注ぎ込んでいた。

「あら、はずかしいじゃありませんか。船に妻が泊まり込むなんて、皆さんそんなことをなさるのかしら」

「はずかしくなんか無い。君はあまりにお嬢さんすぎて困るよ」

「お断りしておきます。私はそんな奥様方とどうもちがう人間に生まれついているらしいですわ。あなたがそんなことを私におさせになるんだったら、私、どっかに逃げてしまいますからね。とてもたまらないわ」

由良は笑っていた。

雪子の言っていることをきくとやっぱ二人の感情のオクターブは相当ちがっている。しかし、由良は、世故にたけた夫が若妻の感情を根気よく育てて行く話を思い出していた。もう甘ちゃんい恋人同士ではない。もう一步高い所にあがって、彼女を導いて行くのだ。

短大を出てから五ヵ月ばかりその大学の庶務課に働いただけが、雪子にとって世間との交りのすべてであった。彼女の感情が、一人前の女としてまだ生硬なのは当然だろう。一週間たらずの同棲生活ではとても踏破しつくせない広大な処女地が、彼女の中には残されているのだ。彼女をまだ握り切れない心残りのまま船に乗り込んで、やがて出帆し

たら、一ヵ月あまりはなれていなければならないのは、いかにも辛いことだ。由良は、男として、こういう未練を相手に見せるものではないかも知れないとも思ったが、あえてかきさなかった。

唯一人の妻に対して、誠実であるならあるほど、自分の気持のすべては雪子に懸けてあるのだ。

大タンカーから日久丸にかけた板の橋を渡って、日久丸の甲板に移ると、ブリッジの上に立ってこちらを見ている船員の姿が見える。それを認めると、いままであれ程鼻柱のつよかった雪子が急に怯んでいた。

「お願い、もうここで帰らせて。私もうかえっちゃうから——」

「そんなことをいわずにここまで来たんだから僕の居室を見て行きなさい。僕が一ヵ月暮らす部屋を見て頭に入れておく必要はないの」

思わず、由良は恨みがましい言い方になっていた。雪子は強い言葉にも似ず、由良の後をついてきた。エンジンが底強く床を震動させているおもての階下に「クラーク居室」と札の出ている部屋があった。生々しいペンキの匂いが鼻をついた。

「ここですよ。政府の保証で借った金で作った計画造船だから、部屋の装飾まで制限されて、ひどく殺風景だけれど